

都会はぜいたくだ

小川未明

青空文庫

デパートの高い屋根の上に、赤い旗が、女や子供のお客を呼ぶように、ひらひらとなびいていました。おかねは、若い、美しい奥さまのお伴をしてまいりました。

そこには、なんでもないものはありません。みるもの、すべてが、珍しいものばかりでした。

東京へ出てきてから、奥さまにつれられて、方々を歩きたびに、田舎のさびしいところで働いて暮らす、お友だちのことを思わぬことはなかったのです。

「おつねさんなんか、こんなにぎやかなところは知らないのだ……。」と思うと、青々とした田圃の中に立っている、友だちの

姿すがたがありありと見みられました。

千円えん、二千円えんという札ふだのついた、ダイヤモンドの指輪ゆびわが、装そうし

飾よくひん品の売うり場ばにならべてありました。それを見みただけでもび

つくりしたのです。また、食しょくりようひん料しよくりようひん品ひんを売うっている場ば所しょには、

遠とおい西にしの国くにからも、南みなみの国くにからも名物めいぶつが集あつまっています。そ

して、それにも高たかい値段ねだんがついていました。

「まあ、こんな高たかいものを、東とうきよう京きやうには、食たべる人ひとがあるのだ

ろうか？」と、疑うたがわれたのであります。

「おかねや、おまえの国くにの名物めいぶつには、どんなものがあつて？」

と、奥おくさまは、ふりかえつて、聞きかれました。

おかねは、なんだろう？　と思おもいました。小しょう学がっこう校こうにいる時じ

分、地理の時間に、自分の国の名産をいろいろ教えられました
 が、この東京にまで出されているような名物は知らなかつ
 たのでした。

「わかりません。」と、耳を赤くしながら、答えるよりほかなか
 ったのです。

見て歩くうちに、相模川のあゆや、八郎潟のふなまで、な
 らべられてありました。

「まあ、川魚までが、方々から、汽車で送られてくるのかし
 らん。」

このとき、彼女の頭に、弥吉じいさんの顔が浮かびました。
 じいさんは、川魚をとって生活したのであります。どんな暗

い雨あめの降ふる晩ばんも出でかけてゆきました。なんでも、青あおいかえるを針はりにつけて、どろ深ふかい川かわで、なまずを釣つり、山やまから流ながれてくる早瀬はやせでは、あゆを釣つるのだという話はなしでした。

夏なつ、秋あき、冬ふゆ、ほとんどおじいさんの休やすむ日ひはありませんでした。ちようど百姓しやうこめが米こめを作つくると同おなじように、また、職しよつこう工こうが器具きぐを作つくると同おなじように、魚うおをとるのも、一ひと通りでない骨ほねおりであり造つくると同おなじように、心こころある人ひとなら、だれでもこのようにして作つくられた、食しょく物もつはむだにし、また器具きぐを粗末そまつに取り扱あつかうことをよくないと思おもうでありますよう。

このおじいさんが、これほど、骨ほねをおつて釣つり上あげた魚うおを、だれが、食たべるのだろうか？ そう思おもったことに、無理むりはなかつた

のです。

なぜなら、雪ゆきの降ふる寒さむい晩ばんに、おじいさんは、出でかけてゆきま
した。村むらの子供こどもらは、窓まどの外そとで鳴なり叫さけぶあらしの音おとに耳みみを澄すまし
て、幾いくまい枚まいも蒲団ふとんをかぶつても、まだ震ふるえがちにちぢこまつてい
るのに、おじいさんは出でかけなければなりませんでした。

川かわの上うえには雪ゆきが積つもっていました。そして、その下したの流ながれは、
止とまつていました。おじいさんは雪ゆきを掘ほり氷こおりを破やぶると、その下したに、
黒くろい水みずがものすごく、じつと見み上げています。おじいさんは、カ
ンテラの火ひで水みずの面おもてを照てらしました。これは、眠ねむっている魚うおを呼よ
び寄よせるためであります。

もう長ながい間あいだ、穴あなの中なかに、または、深ふかい水底みずそこに眠ねむつて、春はるのく

るのを待つていた魚たちは、ふいに明るくなつたので、びっくりしました。

「なんだろうな。」

「月でないかしらん？」

「雪が積もつていゝのに、月のさすはずがないじゃないか。」

「でも、明るく、なにか、水を照らしているようだ。」

「それにちがいない。おれたちは、もう長い間眠つた。いつのま

にか、雪が消えて春になつたのでないだろうか。」

「そんなことはない。まだ、水が、こんなに冷たい。そして、ど

こにも春らしい気分はこない。こんな変わったことのあるときは、

要心が必要なのだ。」

「どれ、出かけて、みとどけてこよう。」

「それがいい。それがいい。」

魚たちは、半分おそれながら、ちらちら動く、カンテラの火の方に近づいたのです。火は赤い花が、風に吹かれて、地面をはいながら頭を振るように、暗い水の面にゆれていました。

「もう、だいぶ、魚の寄った時分だな。」

おじいさんは、手網で、ふいにすくうこともあれば、また糸を垂れて釣ることもありました。

おかねばかりでない。村の子供たちも、大人も、人のいい弥吉じいさんが、魚をとる苦心を知らないものはありませんでした。

それですから、おじいさんのとった魚は、いくらうまくても、村

のものは、もつたいなくて食^たべられない氣^きがしました。

おじいさんは、とつた魚^{さかな}は、ふなでも、なまずでも、またあゆでも、みんな町^{まち}へ持^もっていつて売^うったのであります。

「おじいさん、命^{いのち}がけでとつた寒^{かん}ぶなだ。いい値^ねに売^うれるだろう。」と、人^{ひと}が聞^ききますと、

「なんの、おかゆがすすられるだけのものです。」と答^{こた}えて、頭^{あたま}を振^ふりました。

「だれが、おじいさんのとつた、魚^{さかな}を食^たべるだろうか。」と、おじいさんに聞^ききますと、

「さあ、だれが食^たべるものか、そればかりは、わしにもわからな
い。」と、おじいさんは、答^{こた}えたのでした。

お金かねがいくら高くても、うまいものを買う人ひとのたくさんいる東とう京きやうへ、あのおじいさんのとつたなまずや、寒かんぶなは、この遠とお

い北きたの八郎ろうがた 瀉おくから送おくられてきたふなのように、送おくられたのではないだろうかと、おかねは考かんがえました。

「奥おくさま、どうして、東とうきやう 京ひとの人は、高たかいお金かねを出だして、めずらしい、うまいものを食たべるんでしょうか。」と、おかねは、ききました。

「おまえ、それは、都みやこと田舎いなかとは、いっしよにならないよ。東とうき 京きやうの人は、口くちがおごっているから。しかし、このごろは、田舎いなかも、だんだん東とうきやう 京おなと同じになつてきたという話はなしだよ。」と、奥おくさまは、おつしやいました。

しかし、おかねは、自分の生まれた村は、昔とかわらないと思つていました。

「奥さま、そんなことをすると、私どもには、罰があたります。」と答えた。

「ほほほ。」と、奥さまは、笑われました。

いろいろ外国からきた、びんにはいったよい酒のならばあるところへきて、奥さまは、青い色の酒をお買いになりました。

「奥さま、お酒をめしあがるのでございますか？」と、おかねは、ききました。

「これは、甘いお酒なのよ。」

ほんとうに、家へ帰ると、かわいらしいグラスのコップについ

で、奥さまは、青いお酒をめしあがりました。

「おかね、おまえも一杯飲んでごらん。」といわれたので、おかねは、びつくりして、

「私は、まだ、お酒を口にいられたことがありません。」と、辞退しました。

「いいえ、このお酒は、けつして、毒にはならないの。そして、それを飲むと、なにかしらん、昔のことを思い出すから……。」と、奥さまは、おっしゃいました。

「奥さま、昔のことといますと……。」と、おかねは、なんとなく、なつかしいような不思議な気がしたのです。

「そうなの、忘れてしまったことを思い出すのだよ。」

おかねは、そういわれると、飲^のんでみたくなりました。

「すこしばかり、いただきます。」といいました。

青^{あお}い夕^{ゆう}空^{ぞら}のように、淡^{あわ}いかなしみをたたえたお酒^{さけ}が、小^{ちい}さな

コップにつがれました。おかねは、それに、くちびるをつけると、甘^{あま}くて酒^{さけ}という感^{かん}じはしませんでした。これなら、もつと飲^のめるように思^{おも}いましたが、やはりそれは、酒^{さけ}でありました。いつしか、いい心^{こころ}地^ちとなつたのであります。

しばらくすると、胸^{むね}の中^{なか}が熱^{あつ}くなりました。そして、おかねは、飲^のむのでなかつたと思^{おも}いました。

「忘^{わす}れてしまった、昔^{むかし}のことつて、いつ、思^{おも}い出^だすのだろう？
奥^{おく}さまは、私^{わたし}をおだましになつたのかもしれない。」と思^{おも}つて、

床につきました。

* * * * *

弥吉やきちじいさんの孫まごに、新吉しんきちという少しょう年ねんがありました。お
かねとは仲なかよしでありました。新吉しんきちには両りょう親しんがなく、おじ
いさんに育てそだられたのであります。

ある日ひ、二人ふたりは、草原くさはらの上うえで遊あそんでいました。すると、新しん吉きち
は、ぼんやりと立たって、あちらの高たかい山やまの方ほうを見ていました
が、急きゆうに、しくしくと泣なき出だしました。おかねは、驚おどろいて、

「どうしたの？ 新しんちゃん。なぜ、泣なくの……。」と、たずねま
した。

新吉しんきちは、だまって、両手りょうてで自じ分ぶんの目めをこすって、涙なみだをふき

ました。

「どうしたの？ 新ちゃん。」と、おかねは、かさねて、たずねました。けれど、新吉は、さびしそうな顔つきをして、だまつていました。そして、いまのことは、すぐに忘れてしまつて、二人はそれから、おもしろそうに遊んだのであります。

新吉は、九つするとき、ほんの一夜、病氣になつて臥たばかりで死んでしまいました。弥吉じいさんの、歎きは一通りではありません。その後、おじいさんは、さびしい、頼りない生活を送らなければなりませんでした。おじいさんは、孫の新吉と仲よしであつた、おかねをいつまでもかわいがつてくれました。

いつのまにか、おかねは、床の中で、忘れていた昔のことを思

い出していました。すると、急に、昔がなつかしく、ふるさどが恋しくなつて、床の中ですすり泣きをしました。そのうちに、眠入つてしまつたのです。

眠りがさめると、いいお天気でありました。おかねは、もう昨日のことは忘れて、せつせと働きました。夏の日は、はやくから庭さきに当たつて、まつばぼたんの花が、黄・紅・白、いろいろに美しく燃えるように咲いていました。

「まあ、きれいだこと。」と、見とれていると、小ばちが、羽を鳴らして、花の上を飛んでいます。そこへ、奥さまは、お見えになつて、笑いながら、

「おかねは、昨夜、なにか、夢を見たね？」と、おつしやいまし

た。

おかねは、頭あたまをかしげましたが、思い出すおもことができませ

しかたなく、下したを向むいて笑わらっていました。

「怖おそろしい夢ゆめでも見たみのか、大おおきな声こえを出だしてよ。」と、奥おくさま

はいわれました。

おかねは、久ひさしぶりに、子こ供どもの時じ分ぶんのここを床とこにはいつてから

思い出おもしただことだけはわかりました。けれど、そのほかのことは、

わかりませんでした。彼かの女じよは、また、はればれとした顔かおをして、

おもしろそうに、仕し事ごとをつづけました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「教育研究」

1930（昭和5）年8月3日

※表題は底本では、「都会《とかい》はぜいたくだ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

都会はぜいたくだ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>